

和語の非連濁規則と連濁傾向

——『日葡辞書』と『和英語林集成』から——

和語の非連濁規則と連濁傾向

戸田綾子

一 はじめに

連濁・非連濁に関与する条件のうち、主に非連濁についてはあるが、多くの研究がなされてきた。連濁とは、広く捉えるなら、複合語や文節構成において、後接の要素の語頭子音が有声音化する現象を指す。これを広義の連濁と呼んでおく。文節構成における連濁というものは、非常に少なく、鼻音、濁音、長音などと大きく関係し、かなり法則的な音声同化現象として捉えられよう。そこで、複雑な様相を示している複合語の連濁とは切り離して考えられることが多くなり、複合語の連濁のみを指して連濁と捉えることがある。この複合語のみを対象とする考え方を前述のものに対し、狭義の連濁と呼ぶことにする。拙論は、もっぱら狭義の連濁について考察するものである。

さらに、複合語の連濁においても和語と漢語とに分けて論じられることが多い。そこで拙論でも、漢語より複雑な様相を示すと予想される和語の複合語の連濁に限定し、中世と近代の二つの時代において、どのような規則性がどの程度存在し、どのように変化したかについて調査、研究を行うものとする。ただし、和語を含む混種語は、和語化したものと考え、一括して考察することにする。

二 調査対象と方法

調査の対象は、『日葡辞書』と『和英語林集成』の二辞書とする。この二辞書は、どちらも外国人によるローマ字表記を採るもので、国内の資料に比較して、清濁の違いが明確であるため、連濁についての調査を行うのにふさわしい資料であると思われる。

調査方法としては、対象となる二辞書の連濁する可能性のある複合語（すでに連濁しているものを含む）全てに以下の条件に該当するかどうかを調査するものとする。^{<注1>}

1 連濁か非連濁か

- 2 語種（和語か漢語もしくは漢語以外の外来語を含む混種語か）
- 3 語の構成（表1参照）
 - a 活用の有無・品詞
 - b 前項後項の品詞
 - c 前項後項の意義関係
 - d 特殊なもの（数量程度を表すものや助詞を含むもの疊語など）
 - e 一項が接辞のものや前項が被覆形もしくは省略形のもの
- 4 後項の濁音・鼻音・促音
- 5 前項末尾音節の子音（ただし母音のみのときは無記入，長音のときはその母音）
- 6 前項末尾音節の母音（ただし撥音のときはNを記入）
- 7 後項頭音節（連濁該当音節）の子音
- 8 後項頭音節の母音
- 9 前項後項の音節数
- 10 同音連続のタイプ
- 11 前項の濁音の位置
- 12 二辞書の異同
- 13 古語表記

1の連濁か非連濁かにおいては，連濁形をA，非連濁形をB，連濁・非連濁両形の見られるものをA—Bとする。

2の語種は，A和語+和語・B和語+漢語・C漢語+和語・D和語+外来語・E外来語+和語の5種に分類する。ただし外来語は漢語以外のものを指す。

3の語構成は，表1のとおりである。

4の後項の濁音，鼻音については，

- | | |
|-------|-------------------------|
| A | 後項第2音節が濁音のもの |
| B—a | 第3音節以降に濁音のあるもの |
| B—c | 第2音節が鼻音のもの |
| B—a c | 第2音節が鼻音で，第3音節以降に濁音のあるもの |
| B/A | 第2音節の鼻音が濁音と交替可能であるもの |
| T | 第2音節が促音 |
| B | その他 |

のように分類する。ただし，A，B—a，B/A の順に優先するものとする。

表1 語 構 成

A 活用しない語

- 1 名詞+名詞
- 2 語根体言+名詞
- 3 居体言+名詞
- 4 名詞+居体言
- 5 動詞連用形+居体言
- 6 用言連体形+名詞
- 7 語根体言+居体言
- 8 名詞+語根体言
- 9 居体言+語根体言
- 10 音象徴語+居体言
- 11 音象徴語+名詞
- 12 語根体言+語根体言

A 修飾関係

- T 数量・程度
- N 助詞を伴うもの
- J 疊語
(音象徴語を除く)

B 並列関係

- S 一項が接辞
- H 前項が被覆形
- R 前項が省略形

G 音象徴語

X 文節を含むもの(「我は顔」「たそがれ」など)

活用する語

B 複合動詞

- 1 名詞+動詞
- 2 動詞連用形+動詞
- 3 語根体言+動詞
- 4 音象徴語+動詞

C 複合形容詞

- 1 名詞+形容詞
- 2 語根体言+形容詞
- 3 居体言+形容詞
- J 疊語形容詞

和語の非連濁規則と連濁傾向

9の前項後項の音節数については、「2+3」のように表す。

10の同音連続については

- A 前項の末尾音節と後項の頭音が同音
- B 後項の頭音と次音節が同音
- C 連濁することによって前項の末尾音節と後項の頭音節が同音となるもの

の3類に分類するものとする。

11の前項の濁音の位置については、後項の濁音が第3音節以降にあっても、連濁しにくいということに対して、前項の濁音も同じ性格を持つものかどうかを調べるもので、前項末尾音節が濁音のものを1、末尾より2番目が濁音のものを2、3番目が濁音のものを3と表し、以下は、これに準じる。

12では、まず『日葡辞書』に対して、『和英語林集成』との連濁の異同を調査する。

13は、『和英語林集成』に古典語としての短剣†印で示されるものを調査する。古典語はK、その他は無記入とする。

以上の項目について、『The Card』^{<注2>}を使用して、コンピュータ入力を行い、それぞれの連濁する確率を見ることにする。以下この確率を連濁率と称する。

三 検証と考察

<1> 一次連濁率

まずそれぞれの辞書における連濁率について各項目毎に調査を行った。全体としては表2のとおりである。連濁率の算出は、

$$\text{連濁率} = \frac{\text{連濁用例数}}{\text{用例数} - \text{両形ある例数}} \times 100$$

の算式による。

表2 全体の連濁率

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
『日葡辞書』	4,646	2,086	85	45.75
『和英語林集成』	7,279	3,654	72	50.70

全体の連濁率では、『和英語林集成』のほうが約5%高くなっており、連濁現象が時代が下がるにつれて減少するということはない。

〔α〕 語 種

語種別に見ると漢語+和語のものが他より高くなっている。しかし、それは「う・むの下濁る」に相当する撥音、直音の直後の連濁が多いためであろう。また『和英語林集成』における外来語との混種語は、用例数が少ないものの、連濁するものが6例あり、連濁は16世紀に初めて日本に入って来た西洋の語にも影響を及ぼしていたことがわかる。

〔β〕 語 構 成

語構成については表3のとおりである。活用するものとしなないものでは活用しないものの方が連濁率が高いと思われ、複合動詞については約6パーセントの低連濁率を示した。しかし、複合形容詞については活用しないものより10%近く高い連濁率を示すこととなった。これは、複合形容詞が複合動詞より定型化しているからであろう。

表3において注目すべきことは、まず、並列関係にある語には連濁例がほとんどな

表 3-1 語構成『日葡辞書』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
A 活用しないもの	3,211	1,952	69	62.13
A1A 名詞+名詞 修飾関係	1,394	886	31	65.00
2A 語根体言+名詞 //	245	109	8	45.99
3A 居体言+名詞 //	493	316	10	65.42
4A 名詞+居体言 //	642	416	20	66.88
5A 動詞連用形+居体言 //	181	100	0	55.25
6A 用言連体形+名詞 //	7	0	0	0
7A 語根体言+居体言 //	35	30	0	85.71
8A 名詞+語根体言 //	36	31	0	86.11
9A 居体言+語根体言 //	1	1	0	100
10A 音象徴語+居体言 //	2	1	0	50
11A 音象徴語+名詞 //	2	2	0	100
12A 語根体言+語根体言 //	1	1	0	100
1B 名詞+名詞 並列関係	35	0	0	0
5B 動詞連用形+居体言 //	7	0	0	0
G 音象徴語	57	3	0	5.26
J 疊語	70	56	0	80
X 文節を含むもの	3	0	0	0
A-T 数量・程度	26	2	0	7.69
-N 助詞「つ」「な」などを伴う	4	3	0	75
B 複合動詞	1,370	88	14	6.49
1 名詞+動詞	95	67	12	80.72
2 動詞連用形+動詞	1,264	14	2	1.11
3 語根体言+動詞	6	5	0	83.33
4 音象徴語+動詞	5	2	0	40
C 複合形容詞	65	46	2	73.02
1 名詞+形容詞	45	30	2	69.77
2 語根体言+形容詞	5	4	0	80
3 居体言+形容詞	9	7	0	77.78
J 疊語形容詞	6	5	0	83.33
S 接辞を一項とするもの	163	37	2	22.98
A 複合名詞	55	31	2	58.49
B 複合動詞	99	0	0	0
C 複合形容詞	9	6	0	66.67
H 前項が被覆形	192	102	10	56.04
R 前項末尾が省略	20	16	0	80

和語の非連濁規則と連濁傾向

表 3-2 『和英語林集成』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
A 活用しないもの	5,690	3,307	62	58.76
A1A 名詞+名詞 修飾関係	2,417	1,508	24	63.02
2A 語根体言+名詞 //	341	181	6	54.03
3A 居体言+名詞 //	935	573	12	62.08
4A 名詞+居体言 //	1,287	755	10	59.12
5A 動詞連用形+居体言 //	303	137	10	46.76
6A 用言連体形+名詞 //	34	4	0	11.76
7A 語根体言+居体言 //	42	31	0	73.81
8A 名詞+語根体言 //	47	30	0	63.83
9A 居体言+語根体言 //	4	2	0	50
10A 音象徴語+居体言 //	6	2	0	33.33
11A 音象徴語+名詞 //	21	16	0	76.19
1B 名詞+名詞 並列関係	45	1	0	2.22
5B 動詞連用形+居体言 //	17	1	0	5.88
12B 語根体言+語根体言 //	2	1	0	50
G 音象徴語	112	6	0	5.36
J 疊語	72	55	0	76.39
X 文節を含むもの	4	3	0	75
A-T 数量・程度	45	11	0	24.44
-N 助詞「つ」「な」などを伴う	17	8	0	47.06
B 複合動詞	1,419	236	8	16.73
1 名詞+動詞	279	177	6	64.84
2 動詞連用形+動詞	1,079	36	2	3.34
3 語根体言+動詞	20	17	0	85
4 音象徴語+動詞	41	6	0	14.63
C 複合形容詞	170	111	2	66.07
1 名詞+形容詞	110	69	2	63.89
2 語根体言+形容詞	11	5	0	45.45
3 居体言+形容詞	22	21	0	95.46
J 疊語形容詞	27	16	0	59.26
S 接辞を一項とするもの	200	69	2	34.85
A 複合名詞	149	56	2	38.10
B 複合動詞	28	3	0	10.71
C 複合形容詞	23	10	0	43.48
H 前項が被覆形	283	176	4	63.08
R 前項末尾が省略	66	41	2	64.06

いことである。次に音象徴語には連濁するものが非常に少ないことである。さらに文法的に結合の弱い、前項が用言の連体形であるものも、用例数が非常に少ないが、すべて非連濁となっている。そして少ない連濁例が『日葡辞書』ではなく、『和英語林集成』にのみ現れることが重要である。

また前項後項の関係から見ると、修飾関係で後項に語根体言のくるものは『日葡辞書』で約87%、『和英語林集成』で約63%の連濁率を示している。

他に、低い連濁率を示している複合動詞の中でも特に動詞連用形+動詞のものがそれぞれ約1%、3%とそれだけが低くなっていること、また名詞+動詞の形のもが約81%、65%と高くなっているのに対し、その名詞化したものと捉えられる名詞+居体言が約67%、59%とそれより低くなっていることも問題となろう。前者は動詞連用形+動詞の形のもの複合語としての認定の問題としかかわるものであり、後者は複合動詞とその連用形名詞が、単純動詞の連用形の名詞化と同じ次元では扱えず、構成要素がもともと名詞化していたものであった可能性の高いことを示している。

名詞+居体言については、『日葡辞書』だけではあるが、さらに目的格を取るものと、その他の2類に分けることにすると、目的格を取るものは約48%、その他は約82%となり、やはり目的格を取るものはやや連濁しにくいと考えられそうである。ただし、複合動詞に関しては差がなく、影響がないことが明らかになった。

また数量・程度を表す語、接辞を含むものは連濁率が低かった。前項が被覆形のもものは高い連濁率が予想されたのだが、意外に高くなく、前項末尾に省略形のあるものは、用例こそ少ないが、『日葡辞書』ではかなり高い連濁率を示している。

〔7〕 後項の濁音と鼻音、促音

調査の結果は表4のとおりである。後項の濁音は第2音節にあるものも第3音節以下にあるものも全て非連濁であり、その位置に問題はない。ただし『和英語林集成』には後項に濁音がありながら連濁するものが「Dambashigo (段梯子)」「Fumbatagaru (踏んばたがる)」の2例現れる。

なお、後項の第2音節がナ・マ行音で、ダ・バ行音と交替可能なものも連濁しにくいはずだが、『和英語林集成』には「Aozamurai (青侍)」という連濁例が現れる。さぶらい」という異形にとらわれ、本来連濁すべきでなかった「さむらい」が「田舎侍」「芋侍」のように積極的に連濁形を取るようになるのである。ここではこの1例しか検出できなかったが、複合語の後項としては連濁した形のもが習慣化していたと考えられる。「梯子」の例も現代語では「縄梯子」「吊梯子」と連濁傾向が強く、習慣化の結果と考えたい。

表4 後項の濁音と鼻音, 促音『日葡辞書』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
A 後項第2音節が濁音	571	0	0	0
B-A 第3音節以下に濁音	116	0	0	0
B-A C 第2音節が鼻音, 以下に濁音	27	0	0	0
B-C 第2音節が鼻音	583	347	8	60.37
B/A 同鼻音が濁音と交替可能	10	0	0	0
T 第2音節が促音	1	0	0	0
B その他	3,338	1,739	77	53.33

『和英語林集成』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
A 後項第2音節が濁音	735	0	0	0
B-A 第3音節以下に濁音	118	2	0	1.69
B-A C 第2音節が鼻音, 以下に濁音	21	0	0	0
B-C 第2音節が鼻音	1,177	718	8	61.42
B/A 同鼻音が濁音と交替可能	10	1	0	10
T 第2音節が促進	9	9	0	100
B-C P 第2音節が撥音, 次が半濁音	1	0	0	0
B その他	5,209	2,924	77	56.83

表中の B-CP は「Yutampo (湯たんぼ)」の1例で, Pは半濁音のものである。しかし第2音節に半濁音のくるものは見られない。

〔δ〕 前項末尾音節

前項末尾音節については、^{〔註3〕}『日葡辞書』で撥音が91%, ウ段長音が73%, オ段長音が77%というように、高い連濁率を示している。これから「ウ・ムの下濁る」ということが傾向としてあったことがわかる。ところが、『和英語林集成』ではそれぞれ72%, 57%, 66%とかなり低くなっており、全体の連濁率自体が高くなっているのに対して、逆行していることになる。

一方、連濁率の低いものとしては母音連続の31%, 42%, 流音ラ行音の36%, 42%, 濁音のBの36%, 44%, Jの36%, 51%, Gの47%, 43%が挙げられるが、全体の連濁率と比較して、連濁忌避の傾向があるとはいえない。

〔ε〕 後項頭音節

後項頭音節つまり連濁該当音節においては子音Sが35%, 37%とX(シャ行)が24%, 30%, C(チャ行)が29%, 9%と低い連濁率で、これらの子音は調音点、調音方法等に非常に近いものがあり、音声的性格が影響するのではないかと考える。

なお母音には特徴的なものは見られない。

〔6〕 音 節 数

前項と後項の音節数（『日葡辞書』のみ）については表5の^{<注4>}とおりである。表5によれば、後項が長いものほど連濁率が低くなっている。さらに『和英語林集成』では、前項が長いものほど連濁率が高くなっている。音節数が2+2のものは平均値に近い値を示しており、複合語の基本的音節数であるため安定した数値を示すと思われる。

表5 音節数『日葡辞書』

前項 後項	1	2	3	4	5	6	計
1	24 14 58.33	225 118(6) 53.88	66 47(3) 74.60	7 4 57.14			322 183(9) 58.47
2	354 220 63.58	1,637 843(39) 52.75	367 242(8) 67.41	73 59 80.82		1 0 0	2,432 1,364(55) 57.38
3	194 109(6) 57.98	1,009 287(15) 28.87	252 80 31.75	35 18 51.43	2 1 50		1,492 495(21) 33.65
4	40 13 32.5	243 21 8.64	72 8 11.11	3 0 0			358 42 11.73
5	3 0 0	26 2 7.69	9 0 0		1 0 0		39 2 5.13
6	1 0 0	2 0 0					3 0 0
計	616 356(14) 59.18	3,142 1,271(60) 41.24	766 377(11) 49.93	118 81 68.64	3 1 33.33	1 0 0	4,646 2,086(85) 45.75

〔7〕 同音連続のタイプ

同音連続については表6のとおりである。『日葡辞書』では後項の頭音節と次音節が同音の場合、28%と低くなっているが、その他は平均連濁率よりやや高くなっている。

表6 同音連続のパターン『日葡辞書』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
A 前項末音と後項頭音が同音	40	24	0	60
B 後項頭音と次音節が同音	115	30	6	27.52
C 連濁すると前項末音と同音	7	4	0	57.14

『和英語林集成』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
A 前項末音と後項頭音が同音	74	44	0	59.46
B 後項頭音と次音節が同音	110	62	0	56.36
C 連濁すると前項末音と同音	16	7	0	43.75

る。『和英語林集成』では、連濁すると前項の末尾音節と後項の頭音節が同音になるものが多少低いものの、他は平均的な値を示している。

〔θ〕 前項の濁音

前項の濁音については表7のとおりで、前項の濁音が後項の濁音と同様に連濁を忌避する傾向は認められない。^{<注5>}

表7 前項の濁音『日葡辞書』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
1 前項末尾音節が濁音	368	155	14	43.79
2 末尾より2番目の音節が濁音	245	129	6	53.97
3 末尾より3番目の音節が濁音	31	19	0	61.29
4 末尾より4番目の音節が濁音	5	4	0	80

『和英語林集成』

条 件	例 数	連 濁	両	連濁率
1 前項末尾音節が濁音	625	297	6	47.98
2 末尾より2番目の音節が濁音	311	151	0	48.55
3 末尾より3番目の音節が濁音	35	24	0	68.57
4 末尾より4番目の音節が濁音	9	8	0	88.89

〔ι〕 二辞書の異同

同形の語および類似の語は全体で1,899例あり、949例が連濁し、その連濁率は51%（両形のもの43例あったため）であり、『日葡辞書』より高い値を示している。そのうち、94例が変化し、変化する確率は、連濁形から非連濁形になるもの約2%、

非連濁形から連濁形になるもの約4%、連濁・非連濁両方に揺れのあるものを含め、変化率は約5%、およそ20例に1例の割合となる。

〔κ〕 古 語

『和英語林集成』には古語という記入のあるものがあるが、古語とされたものは53%、その他は51%と連濁率には大きな差はない。

〈2〉 二次連濁率

以上より、用例数の極端に少ないものを除き、100%連濁する条件はなかったが、連濁しない条件はいくつかあった。

- (1) 後項第2音節に濁音がある場合には全く例外は見られない。次に『日葡辞書』では連濁率が0%でありながら、『和英語林集成』においていくつかの例外の現れる条件がある。その一つは、
- (2) 後項第2音節以下に濁音がある場合で、例外は2例約1%の連濁率である。また
- (3) 後項第2音節が濁音と交替可能な鼻音である場合は(1)に類するものである。

語構成の面からは、

- (4) 前項後項が並列関係にある場合があげられる。これも『日葡辞書』では例外なく非連濁で、『和英語林集成』では3例の例外が現れ、その連濁率が約5%になる。

そこで、二辞書の全用例から、以上の四つの条件に該当するものを除外して、今一度連濁率を算出することにした。そこで、以上見てきたものを「一次連濁率」と呼び、以下の新しい連濁率を「二次連濁率」と呼ぶことにする。なお、非連濁のものばかりを除外したため、一次連濁率より二次連濁率は当然高くなる。二次連濁率以下については、顕著な条件についてのみ述べることにする。

〔β〕 語 構 成

語構成から分析した連濁率については、全体的に高くなっているものの、前項が連体形であり、文法的結合を行なっているものが0%、13%、音象徴語がともに6%、動詞連用形+動詞が1%、4%と低い連濁率になっているのが目立つ。接辞を含む複合動詞も0%、12%と低い連濁率を示している。これより、『日葡辞書』で0%など規則的な非連濁を示していたものが、『和英語林集成』において連濁が可能な状態になったと考えられる。

高いものでは、語根体言+居体言の94%、84%、疊語の90%、92%、前項に省略形を取るものの89%、75%が特徴的である。また動詞連用形+動詞を除く複合動詞が82%、64%、複合形容詞が81%、76%と高くなっている。

〔r〕 後項の鼻音

後項の第2音節に鼻音のくるものについては、61%、62%と似た値を示しているが、平均連濁率55%、58%よりとも高く、連濁忌避傾向にはないことがわかる。^{<注6>}

〔ð〕 前項末尾音節

前項末尾に撥音がくる場合は、96%、77%となっている。長音についてもウ段が80%、67%、オ段が88%、74%となっているが、『日葡辞書』より、『和英語林集成』の方が連濁率が低くなっていることに気付く。このことから「ウ・ムの下濁る」というのは中世には該当するが、近代にはかならずしも当てはまらない規則であると思われる。

〔ε〕 後項頭音節

一次連濁率と同じく、子音S、Cが低いほか、『日葡辞書』ではXが平均程度になり、逆にTが低くなった。『和英語林集成』では、S、C、X、T全てが低くなっている。

〔7〕 同音連続のタイプ

これも一次連濁率と似ており、『日葡辞書』では後項の頭音節と次音節が同音の場合29%と低いほかは、平均連濁率より高く、むしろ連濁傾向にあり、同音連続が連濁を忌避するという説には賛成できない。

他に述べなかったものは、一次連濁率に似た状況を示すものと推測されたい。

〈3〉 三次連濁率

二次連濁率より、さらに非連濁傾向の強いものについて考えることにする。

- (5) 用言連体形+名詞
- (6) 音象徴語
- (7) 動詞連用形+動詞が連濁率の低いものであった。また、
- (8) 接辞を含む場合も、32%、41%でやや低くなっている。

この接辞を含むものと、程度・数量などを表すもの、助詞を含むものなどは、一般的でないものと考え、また非常に連濁率の高い畳語（それぞれ90%、92%）も取り出して考えることにする。

そこで、二次連濁率からさらに以上の条件に該当する用例を全て除外して連濁率を算出する。これを三次連濁率と称することにする。

『日葡辞書』の三次連濁率は二次より20%弱上昇し、74%となった。これは、4例に3例が連濁する高連濁率である。一方、『和英語林集成』では11%の上昇を示し、

表8 三次連濁率の音節数『日葡辞書』

前項 後項	1	2	3	4	5	計
1	19	217	66	7		309
	11	117(6)	47(3)	4		179(9)
	57.89	55.45	74.60	57.14		59.67
2	276	1,206	290	63		1,835
	220(8)	782(37)	242(8)	59		1,285(53)
	75.37	66.89	85.82	93.65		72.11
3	108	343	70	21	1	543
	99(4)	282(15)	68	18	1	468(19)
	95.19	85.98	97.14	85.71	100	89.31
4	10	19	9			38
	10	15	8			33
	100	78.95	88.89			86.84
5		1				1
		1				1
		100				100
計	413	1,786	435	91	1	2,726
	322(12)	1,197(58)	365(11)	81	1	1,966(81)
	80.30	69.27	86.08	89.01	100	74.32

『和英語林集成』

1	34	483	116	14		647
	19(4)	243(2)	81	13		356(6)
	63.33	50.52	69.83	92.86		55.24
2	570	2,147	487	108	8	3,320
	414(16)	1,317(36)	401(2)	92	8	2,232(54)
	74.73	62.39	82.68	85.19	100	68.34
3	239	598	119	16		972
	195(4)	475(4)	107	15		792(8)
	82.98	79.97	89.92	93.75		82.16
4	29	54	12	2		97
	20	34	8	2		64
	68.97	62.96	66.67	100		65.98
5			1			1
			0			0
			0			0
計	872	3,282	735	140	8	5,037
	648(24)	2,069(42)	597(2)	122	8	3,444(68)
	76.42	63.86	81.45	87.14	100	69.31

和語の非連濁規則と連濁傾向

69%となった。これは、一次、二次と連濁率で上回ってきた『日葡辞書』より5%下回ることを示す。

〔r〕 後項の鼻音

後項の鼻音についてはそれぞれ平均より8%高く『日葡辞書』で82%、『和英語林集成』で77%となり、中世において鼻音と濁音が同じように連濁を忌避することはない。

〔δ〕 前項末尾音節

前項末尾に母音連続が来るものは、一次、二次と低めの連濁率であったが、三次連濁率になって平均以上の連濁率となった。これは前項が動詞連用形のものに多くあるタイプであり、それが除外されたためであろう。

『日葡辞書』では、撥音の直後に連濁する確率が96%になり、「BANTE (番手)」「SENTE (先手)」の2例が例外となっている。長音についてはウ段が80%、オ段が89%とやや高い連濁率ではあるが、一次、二次連濁率ほど目立ったものではない。

『和英語林集成』については、長音・撥音とも『日葡辞書』におけるほど影響を与えていないが、その他のものも全体に平均的にばらついているようであった。

〔ζ〕 音 節 数

音節数については表8のとおりである。一次連濁率では後項の長いものほど連濁率が低くなり、『和英語林集成』では、さらに前項が長いものほど逆に連濁率が高くなっていったが、三次連濁率においては、その傾向が見られなくなっている。以上から考えられることは、動詞連用形+動詞などの連濁率を低下させていたものが後項の長いものに偏っていたのではないかということである。そこで『和英語林集成』についてのみではあるが、一次、二次と除外された用例を音節数により分け、表9を作成したところ、やはり後項の長いものほど除外される確率が高くなっていった。

表9 『和英語林集成』で、一次、二次と除外された用例の音節数

後/前	1	2	3	4	5	合計
1	9	50	9	3	0	71
2	162	685	87	10	1	945
3	146	712	109	8	0	975
4	42	177	10	1	0	230
5	1	20	0	0	0	21
合計	360	1,640	215	22	1	2,242

〔7〕 同音連続のタイプ

『日葡辞書』のみであるが、前項の末尾音節と後項の頭音節が同音の場合に、連濁率が92%（24例中22例が連濁）と高くなっている。

他の条件については、一次、二次連濁率とさして大きな変化はなかった。

四 結 論

以上の調査結果および考察より連濁・非連濁の条件として顕著なものをまとめると次のようになる。

- 〈1〉 必ず連濁を忌避するもの
 - A 後項第2音節以下に濁音があるもの
 - B 前項・後項の関係が対等であるもの
- 〈2〉 そのほとんどが連濁を忌避するもの
 - C 音象徴語
- 〈3〉 連濁を忌避する傾向にあるもの
 - D 数量・程度を示すもの
 - E 用言連体形を前項にとるもの
 - F 動詞連用形+動詞の語形のもの
 - G 前項が後項の目的格となるもの
 - H 接辞を含むもの
- 〈3〉 Fの動詞連用形+動詞の語形と関連し連濁しにくくなっているもの
 - I 後項の音節数の多いもの
 - J 直前に母音連続のあるもの
 - K 直前の母音がIであるもの
- 〈4〉 やや連濁しにくい傾向のもの
 - L 連濁該当音節が、サ・シャ・チャ行音であるもの
- 〈5〉 逆に連濁しやすいもの
 - M 前項が撥音で終わるもの
 - N 畳語（ただし擬音語の類は除く）
 - O 前項が長音で終わるもの
 - P 前項が省略形であるもの
 - Q 前項末尾と後項頭音節が同音のもの

A, Bは『日葡辞書』においては例外がなく、非連濁規則としての規制力を持っていたが、『和英語林集成』においてはAに「段梯子」「踏んばたがる」の2例、Bに「かんだち」「みえがくれ」「たかびく」の3例の例外が現れるようになり、規則がやや緩和されたものと思われる。

Cの音象徴語で連濁する例外は『日葡辞書』で「さめざめ」「つくづく」「つれづれ」、『和英語林集成』で「ひしびし」「ひそびそ」「たらだら」の計6例である。動詞語幹等の量語とも考えられるものが多い。

D・E・F・Gのそれぞれは前項後項の結び付きが強くないためであろう。Hの接辞を含むことについては、特に複合動詞に集中していることがわかった。

Lのサ・シャ・チャ行音の子音は、音声的には、s, ʃ, tʃ で表され、歯茎から硬口蓋にかけてを調音点とする摩擦音もしくは破擦音であり、共通点が多い。これらが連濁しにくいのは音声的原因によるものであろう。

AからQまでの条件間の関係としては、連濁を忌避するものと誘引するものとは、忌避するもののほうが強い影響力を持ち、優先されるようである。

そこで、非連濁規則のA, Bと非連濁傾向のCからMまでの条件に該当する全てのデータを消去して、四次連濁率を算出する。全体の連濁率は表9のように『日葡辞書』で79%になり、『和英語林集成』で73%になる。これは先に算出した三次連濁率よりさらに高く、『日葡辞書』では5例に4例は連濁するという高連濁率になる。

表10は二辞書の一次連濁率から四次連濁率までを比較したものであるが、見かけの連濁率である一次連濁率は、『和英語林集成』のほうが高いのに対し、非連濁傾向のものを除いていくと『日葡辞書』が逆転する。『日葡辞書』は非連濁規則に忠実で、その他はかなりの確率で連濁することになる。

その他、『和英語林集成』では、A, Bの条件に例外が生じたこと（これは現代語においてはもっと多く見られるかもしれない）、Eの用言連体形を前項に取るものに「あらきばり」「さるまつぶえ」などの例外を生じたことなど非連濁規則が崩壊し、ま

表10 二辞書の連濁率の推移の比較

連濁率	日葡辞書	和英語林集成
一次連濁率	45.74	50.70
二次連濁率	54.94	58.24
三次連濁率	74.32	69.31
四次連濁率	78.85	73.27

た、M、Oの撥音、長音の直後における連濁率が低下するなど、全体的に連濁、非連濁傾向の誘因となるものが曖昧になっている。

以上の理由を二辞書の特性に求めるのではなく、二辞書の編纂された時点の年代差に求めると、つまり、約三百年間の変化としてとらえると、連濁、非連濁に影響を与える諸条件の影響力が薄れ、似た条件にある語などからの類推により連濁、非連濁が決定されたものが増化してきたのではないだろうか。

さらにこの考えを推し進めると、時代をさかのぼることにより、なんらかの規則により、連濁、非連濁が整然と規則づけられていた時代があり、それに近付いていくのではないかという仮説を立てることができる。なお、その規則は、当然、今回認められた規則および傾向とほとんど一致しなければならない。

拙論では対象の性格により扱わなかったアクセント、使用頻度などの問題を含め、その仮説を証明するためにも、上代から現代をつなぐ一貫した検討が必要である。

〈注1〉 調査にあたっては、以下の文献を主に参照した。

- ・奥村三雄「連濁」(国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版)
- ・小倉進平「ライマン氏の連濁論上・下」(『国学院雑誌』16巻7, 8号)
- ・金田一春彦「連濁の解」(『Sophia Linguistica』2)
- ・中川芳雄「連濁・連清(仮称)の系譜」(『国語国文』35巻6号)
- ・平野尊識「連濁の規則性と起源」(『文学研究(九大)』71)
- ・桜井茂治「平安院政時代における和語の連濁について」(『国語国文』41巻6号)
- ・遠藤邦基「連濁語のゆれ」(『国語国文』35巻5号)「非連濁の法則の消長とその意味——濁子音と鼻音との関係から——」(『国語国文』10巻3号)
- ・森田武「日葡辞書に見える語音連結上の一傾向」(『国語学』108)

〈注2〉 株式会社アスキーのカード型データベース名。

〈注3〉 以下、表をあげず、顕著な傾向を述べるのみとする。

〈注4〉 表5は『日葡辞書』についてのみとする。表5は上段が用例数、中段が連濁数、()内が両形、下段が連濁率を示す。

〈注5〉 桜井、遠藤両氏は、前掲の論文において、前項の濁音が連濁を忌避する傾向があるとしている。

〈注6〉 桜井氏は前掲論文において、後項第2音節が鼻音音節の場合も連濁を忌避するとしている。